

ベートーヴェンの「ピアノソナタ30番」、後期ソナタ3曲の完全制覇、今ピアニストの挑戦企画、その一歩。深遠性との相対峙、気持ち引き締め、精一杯、入れ込む感情・漲る気合。雁字搦め金縛りの緊張でなく、コントロール余裕のクレバーさ、上質のコンセントレーション。1楽章の途中、浮き上がる旋律その絡み合い、懸命にコレデモカコレデモカ。3楽章の第6変奏のトリルに向け、盛り上げていく作品、私の捉え方をコッパミジンに粉碎。各箇所には散りばめられた絶妙の美しさ、新たな楽しみ方にハッと戦慄。3楽章の変奏曲、作曲家への畏敬、思い描くイメージ、一步一步丁寧で堅実な表現。クライマックスの第6変奏、ミステリアスな昇華でなく、ハンドメイドな創造を意識、改めて素敵な演奏と感謝。

ベルクの「ピアノソナタ」、流れる音楽、難しさなくごく自然、聴かせどころをわきまえ、ダイナミックにドラマチック、溢れる熱意。音楽のスケルトンを明白に、素敵な音の積み重ねをクリア演奏、ロマンシズムを精一杯に雄弁、音楽の工夫を明確に。後期ロマン派の際立ち、冷静にドライな一筆書きを決め込み、強調するトレンドは採らぬ。衷心から作曲家をリスペクト、親密に会話している様、立ち入ることの出来ない楽しみ、そんな感性と才能を羨ましく思う。20年前、ピアニストが弾いたシェーベルクのOp.33bの演奏を思い出す、今回12音技法前だが、演奏家と新ウィーン派のマッチング、期待通りの感動の再現。コヴァセビッチさん、シュタットフェルトさん、グリモーさんのライブ経験、今日の演奏が一番シックリ。

最初のハイドンの「ピアノソナタ34番」、カッリひたむき誠実な繰り返し、演奏家の呼吸を交えてフリーハンド、思わずニヤリ、4分ー4分ー3分。殆ど聴いたことがなく事前に図書館で予習、CDでは感じられぬザワザワ感、生き生きとしたウィーン雰囲気の出。後半のブラームスの「6つの小品 Op.118」、13年前の高岡以来2回目。全力投球のスタンスは不変、いろんな表情の作曲家の魅力を表出、激しくドラマチックな情熱、優しい穏やかさ、晩秋か初冬の風情、物静かな美しさ。未だに全体として掴みきれぬ、力不足を実感ほろ苦さ、いつの日か近寄りを願うだけ。(2016.12.19)

---

ハイドン：ピアノソナタ 34番 ホ短調 Hob. XVI

ベートーヴェン：ピアノソナタ 30番 ホ長調 Op.109

ブラームス：6つのピアノ曲 Op.118

ベルク：ピアノソナタ Op.1

(アンコール)

シューベルト：楽興の時 へ短調 Op.94-3

モーツァルト／F.サイ：トルコ行進曲

---

---

オッフェンバッハ：オペレッタ「天国と地獄」序曲より

ネッケ：クシコス・ポスト

---